

生活科・総合学習に関する 教師の指導力・カリキュラム開発能力の向上に関する研究

A Study on Improvement
of Teacher's Leadership and Ability for Curriculum development

プロジェクト代表者：宇佐見香代（教育学部准教授）

KAYO USAMI

1. はじめに

本研究は、生活科・総合学習に関する教師の指導力・カリキュラム開発能力の向上を目指すものとして、とりわけ、自律的学習法・総合学習実践研究の伝統・実績がある附属学校園における指導やカリキュラム開発の特色の解明にむけて、臨床的実践的考察を行い、子どもの自律性と教師の指導性の構造的解明を目的とする研究を行ったものである。学習意欲の低下が指摘される現代の学びの状況の中で、とりわけ「なぜ学ばなければならないのか」という子どもや若者たちの声に応えることが、私たち教育に携わるものに求められている。学習意欲の低下の原因は、端的に言えば、子どもたちの生活の発展に結びつく切実な願いや要求に応える学習が創出できていなかったから、あるいは、子どもが生活の中で直面するであろう課題を丹念に捉えて学習材化・カリキュラム化する実践ができていなかったからともいえるだろう。一方、このような教育課題の克服を期待された生活科・総合的学習の導入によって、学校教育において自ら学ぶ意味や価値を実感する学習体験を積み重ねることが求められてきたが、生活科・総合的学習実践の形式化・パターン化の原因は、子ども1人1人の固有な生活の中で生じた個性的な問いの発展による学習の持続・深化がまだまだ乏しいからではないかと思われる。本研究では、このような問題意識から、子どもの生活経験を子どもの学習にどのように反映させ、子どもの学習をその生活の発展にどのように結びつけていくのか、このような実践を支える教師の指導力・カリキュラム開発能力に焦点をあてて考察したものである。

2. 総合学習のカリキュラム開発を担う教師の力量形成

まず最初に、「学ぶ力」「生きる力」の原理的考察とそれに基づいたカリキュラム開発の展開過程の研究及び検証・評価に関する研究を行い、総合学習を中心とした指導法改善・カリキュラム開発を担う教師の力量形成に関する考察を行った。それに基づいて現代の総合学習実践の展開・深化および教師の力量形成に資する提言の構築を行うことをめざした。具体的には、現在一般に行われている生活科・総合学習実践における問題点・改善点に関する検討を行った。例えば、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間専門部会での議論には、総合的な学習の成果と課題の主要な論点が展開されているが、この議論を対象に、教師の指導力向上とカリキュラム開発に観点を絞って検討した。その成果を踏まえて、学校現場で総合的な学習の時間の推進を担う教員に必要な資質を学校経営論を含む形で考察した。

これら一連の研究成果の一旦を、平成18年8月25日に行われた埼玉県教育委員会主催の

「総合的な学習コーディネーター養成講座」にて、現職教員向けの講演で発表した。ここに参加した教員は各学校で教務主任などとして総合的な学習の企画運営を担うものであり、各学校のカリキュラム運営に資すると思われる知見を提供した。

3. 総合学習の実践事例から見る教師の指導性の考察

さらに、かねてから継続している、奈良女子大学附属小学校における総合的な学習の時間の実践研究を行った。同校は、大正期新教育運動の中心校として、わが国の生活科・総合的な学習の実践研究の開拓者的な位置づけを持つ伝統校である。同校には平成18年6月・11月、平成19年2月の計3回の授業参観および教員へのインタビュー調査を行った。まず始めに、ビデオカメラで撮影した授業記録を基に分析を行った。具体的には、同校の教育理念・指導理念である自律的な学習の展開を検討し、そこで①子どもの発言の中に子どもの身近な生活経験がどのように表現されているのか、②子どもの発言を自由に引き出す教師の指導性に関して焦点化して分析を行った。

その結果、子どもたちのそれぞれの生活において経験される事象がそのまま学習のテーマや材料となり、よりよく生きていこうとするとときに生じる疑問や問題を解決する過程がそのまま探究活動・問題解決学習になり、さらにその学習の成果が子どもの生活に還元され子どもの生活の発展や人間としての生き方の深まりに結びつくことが目指される学習が展開されていることが明らかになった。

ここから導き出されることは、教師が子どもがそれぞれ持っている固有の生活を丁寧に一つ一つ掘り起こして学習の対象とし、臨機に柔軟に学習内容を変化させながら、創造的な実践を展開することが、今後の生活科や総合的な学習のパターン化を打破し、さらに発展させていくうえで必要なことだと考えた。さらに検討を進める中で、同校ではそのような学習の充実のために、授業外の朝の会など日々の生活の中に子どもが表現活動を行う契機が多様に準備されており、同校の子どもたちの生活表現が豊かである所以を様々な工夫から読み取ることができた。この点は、子ども主体の学校づくりのためには、総合学習を窓口にしていく可能性を示唆するものであると考えられる。

以上のように、同校は、子どもの生活を学習内容に作りかえていく生活カリキュラムの開発で実績があり、現在においても子どもが日常生活で抱いた疑問を学習課題に高め、カリキュラムを構成していく具体的なプロセスが、教師の指導性や個性を背景にして多様に展開されているところであった。とりわけ、子どもの生活表現を豊かにしていく指導の工夫は示唆に富むことが多く、本研究ではこの点に着目してその意義を明らかにした。なお、この点の研究成果についても、平成19年2月27日に行われた埼玉県生活科・総合学習教育研究会の理事研修会にて発表したところである。

4. 今後の作業予定

以上のような本研究プロジェクトによる研究成果を基に、平成19年6月23日・24日に千葉県で行われた日本生活科・総合学習教育学会の大会にて研究発表を行った。ここでも、教師の指導性や本研究の視点を巡って、活発な議論が行われた。現在この内容を元に論文を執筆中である。生活科・総合学習の実践の充実のために必要な教師の指導性とカリキュラム開発能力の核心についての知見をまとめつつある。